

仏教はどこから来て、どこへ行くのか

釈迦の仏教と大乘仏教の違い、日本の仏教の流れ、これからについて、自分なりの解釈を行います。そして、これから仏教がどのように皆様に寄り添っていくか、皆様は何を拠り所にしたらよいかを考えていきたいと思えます。

日本で信仰されている仏教の殆どは、大乘仏教です。

原始仏教（テーラワーダ仏教）は、お釈迦様のさとりをそのまま伝えていると言われていています。そして、原始仏教を信奉する人で大乘仏教は、正しい仏教ではないという言い方をする人もいます。

イスラム教でも、原理主義とって、現代でも女性の教育を否定したり、アラーの神のために殺人を肯定したりする集団があります。同じように、原始仏教とって、それがあたかも正しい仏教で、大乘仏教を墮落したものというような言い方をする人もいます。

ところが、原始仏教も、宮崎哲也著の「ごまかされない仏教」によれば、お釈迦様の覚りを正しく伝えているとは言えないようです。逆の解釈をすると、仏教は時代の流れにつれて変遷していくという事ではないでしょうか。つまり、絶対に正しい仏教はないということかもしれません。言葉で語られ、抽象的になった真実はないということも仏教では言われています。

まず、私がお伝えしたいことは、「お釈迦さまがなにをさとったのか」、「浄土教はどのように発生したか」「日本の仏教はどのように変わってきたか」ということです。

つまり、浄土教といわれる、「大無量寿経」「観無量寿経」「阿弥陀経」を聖典とする仏教が日本に伝わり、正信寺の宗派となる浄土真宗になるまで、いままでいろいろな宗教学者が論じてきましたが、私なりの解釈をしたいと思えます。

さらに、時代の流れに際して、「日本の仏教は、どのように変わっていくか」を予想したいと思えます。

仏教の始まりは、2500 年ほど前のインドだと言われていています。こういった内容は、ひょっとすると、皆様の方が詳しいかもしれません。

歴史的事実はさておき、菩提樹の下でミルク粥を食べて、お釈迦様は何を悟ったのでしょうか。「真理」を悟ったといわれています。

初転法輪は、かつて修業をした 5 人の友人に会うために十日あるいて悟りを開いたブッダガヤから鹿野園に行きます。

- * 嬌陳如（きょうじんによ）
- * 跋提（ばつだい）
- * 婆沙波（ばしゃば）
- * 摩訶那摩（まかなま）
- * 阿説示（あせつじ）

5人は、苦行を捨て墮落したお釈迦様を見下して、最初は無視するようにしていますが、近づいてくるその姿が光を放っている「光顔巍巍」という状況だったので、話を聞くと、釈尊を師と仰ぐようになります。

初転法輪は、戦車の車が回りし教えが急に広まることを例えた言葉です。その初転法輪では次のことが説かれた言われています

- ・中道がよい『比丘たちよ。この世には近づいてはならぬ2つの極端がある。如来は、この2つの極端を捨て、中道を悟ったのである』
- ・四諦と八正道が苦を滅する道である。
- ・十二縁起（縁起の道理を理解することがさとりである。無明の闇を破ると苦が滅するといいます。）

四諦

- 苦諦は苦しみによって発生する事象です。
- 集諦は苦の原因の追究です。
- 滅諦は涅槃境地です。あるべき姿と言っても良いかもしれません。
- 道諦は苦の原因を滅するため、人間としてあるべき姿に向かう方法を指します。

十二縁起については学者の間でも理解が異なります。最初から十二ではなかつという研究者もいます。俱舍論では過去、現座、未来へと流動する因果関係として記述されています。

縁起として考えるということは、相互に関係していると考えます。

苦苦 肉体的苦痛

壊苦 精神的苦痛

行苦 生命活動そのもののもたらす苦

この中で苦というのは、煩悩が原因という考え方もあります。無明があるから煩悩＝苦があるというように考えるのが十二縁起です。

現在でも、インドではカースト（ポルトガル語、英語）制度が人権の問題になります。バラモン、クシャトリア、ヴァイシヤ、シュードラという階級で、支配層であるバラモンは世襲制で、努力してなれるものではありません。当時のバラモン教は民衆に不平等だったので、お釈迦様が悟りを開くことを伝えることで煩悩から解放される考え方が、人々に身分の平等を感じさせるので広まる原因になったのではないかと思います。

初期仏教でいわれる涅槃（ニルヴァーナ）は、執着しないで解脱すると、心が安らかになることを指します。すなわち涅槃は、自身の心の中にあると考えます。生きている間でも涅槃に到達することもあります。この段階では、極楽浄土に往生するという考えは仏教になかったのではないかと思います。

「おやじ、涅槃で待つ」といって1983年京王プラザホテルで飛び降り自殺した沖雅也という俳優がいましたが、死んだら涅槃に行けるというのは間違った用法だと思います。

この言葉が、仮に「おやじ、極楽浄土でまつ」であっても、自殺で極楽に行こうとするのは、自力ですから、これも間違いです。

それでは、なぜインドで仏教が廃れて、ヒンズー教が広まったのでしょうか。

ヒンズー教は、ブラフマンという宇宙の根本原理を信じ、シヴァ神など神様を信仰しています。仏を信仰する考え方は、お釈迦様が成道した頃には、なかったのではないかと思います。つまり、ヒンズー教がシンボルに対して崇拜するという教えが分かりやすかったと考えるのが自然だと思います。

お釈迦様が亡くなった後、お釈迦様の考え方を伝えるにあたり、正しく伝える為に、経、論、律（三蔵）をまとめるための編集会議が開かれました。お釈迦様の教えは、記憶や口伝（暗唱）で受け継がれたので、人によってズレが生じたのでしょう。亡くなってすぐ第一結集、100年後に第二結集が開かれました。1954年には、第6回がビルマのヤンゴンで行われました。

ただし、この結集で話し合われたことは、黄金をお布施として受け取って良いかなど、ある意味比丘（行者）の倫理観を正すような内容も含まれているようです。

ですので、仏教がインドで廃れていったのは、修行僧が、檀家が負担に思うようなお布施を求めたり、人々が眉をしかめるような腐敗があったりしたのではないかと想像することができると思います。この辺りは、日本の仏教でも、威儀を正していく必要があるのではないかと思います。

浄土教は、大無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経を正依の経としています。王舎城の悲劇が描かれている観無量寿経は、サンスクリット語訳もチベット語訳も見つかっていません。仏教が西域（ガンダーラ）から中国に渡る間に、ニカーヤのなかから作文されたものではないかといわれています。お釈迦様が一日で生老病死の苦を体験する逸話、手塚治虫のブツダにも描かれている四門出遊も同様です。

阿弥陀仏、本願、信、念仏、浄土、往生の概念は無量寿経と阿弥陀経の原点となる経典の出現によって浄土教の思想が確立されました。維摩経や非華経にも浄土の概念は出現しています。しかし、これらは東アジアに重点的に広まっていた。

本日、読経しました「阿弥陀経」を翻訳した鳩摩羅什が、いくつかの経典を中国語に翻訳しました。

その翻訳の過程で、「浄土」「極楽」という言葉を発明しました。

正岡子規が、Baseballを「野球」と翻訳したようなことだと、理解しています。

そういった意味で、極楽浄土は西域で発明されました。中国から見て、西にあるから西方浄土なのだと思います。

日本の仏教の流れ

■国の仏教

卑弥呼の時代には、呪術で国を治めていましたが、中国から仏教だけではなく、国を治めるために律令制度が導入されました。仏教は大化の改新前に日本に入ってきましたが、大化の改新後に日本の国教となります。大化の改新は、日本古来の呪術と仏教の戦いだったといってもよいのではないのでしょうか。

大化の改新は、飛鳥時代の孝徳天皇2年春正月甲子朔に発布された改新の詔に基づく政治的改革。改新の詔は、ヤマト政権の土地・人民支配の体制を廃止し、天皇を中心とする律令国家成立を目指す内容となっています。

しかし、日本で仏教のお坊さんになることはできなかったため、遣隋使、遣唐使を送って僧侶になりました。最澄、空海、阿倍仲麻呂など優秀な人材を海で遭難するリスクを冒して中国に送りました。阿倍仲麻呂は、中国に渡ることはできましたが、帰国途中で台風に会い、ベトナム近くの安南まで流され唐

に戻るも、日本に帰国できませんでした。「天野原ふりさけ見れば春日なる、三笠の山に出でし月かも」と詠んだ歌が、古今集に選ばれています。また、紀貫之の土佐日記にも引用されています。これは、安南に流されてはしまいますが、帰国するにあたり送別会が開かれ、うれしい気持ち詠んだ歌とされていますが、帰国できなくて寂しいという気持ちと捉えたほうが、私は味わいが深いような気がします。

鑑真を日本に招き、唐招提寺を建立したのは、鑑真が授戒を与える、つまり「人をお坊さんにする」資格を持っていたからです。日本で、渡航のリスクがなくお坊さんを大量生産することができるようになりました。

■公家の仏教

平安時代になると、遷都が繰り返されます。人間が密集する都を作ったものの上下水道などの衛生施設が追いついていないため、疫病が蔓延することになり、朝廷は慣れ親しんだ都を捨てて新しく都を作ることを行います。そこで、疫病から守ることを仏教にお願いするわけです。大仏を作り、民衆だけでなく公家が死の恐怖でモチベーションが下がらないようにするために、仏教を政治に利用しました。

奈良時代からの中央集権的な律令政治を、部分的な修正を加えながらも、基本的には継承しました。しかし、藤原氏による荘園の拡大の結果として、律令制と現実の乖離が大きくなっていき、9世紀末から10世紀初頭ごろ、政府は税収を確保するため、律令制の基本だった人別支配体制を改め、土地を対象に課税する支配体制へと大きく方針転換しました。この方針転換は、民間の有力者に権限を委譲してこれを現地赴任の筆頭国司（受領）が統括することにより新たな支配体制を構築するものであり、これを王朝国家体制といいます。王朝国家体制期は、通常古代の末期に位置づけられるが、分権的な中世の萌芽期と位置づけることも可能であり、古代から中世への過渡期と理解されています。

王朝国家体制の確立によって、朝廷は地方統治を事実上放棄しました。その上、桓武天皇が軍団を廃止した結果として、地方は治安が悪化し無政府状態に陥り、16世紀まで日本列島は戦乱が頻発するようになりました。

平安時代末期には源平の争いで、全国で合戦が繰り広げられました。ここにも、戦死する恐怖が人々を苦しめます。戦は武将だけがするものではありません。兵隊の数としては農民がいちばん多いのですが、合戦では僧兵が重要な役割を果たします。文字の読み書きができるということは、兵法などの情報戦にも強いわけです。また、僧房で大量の食事を作ったり、蓄えたりすることにも長けているのです。武将は、お寺を庇護し、僧兵を抱えるようになります。

■武士の仏教と民衆仏教の萌芽

鎌倉時代には、それが顕著になります。鎌倉五山を作り、たくさんの僧を養うようになります。円覚寺では、今でも、山門を入ったすぐ左の塔頭に、弓道の道場があります。また、建長寺の半僧坊は、半分僧侶の宿坊という意味です。修験道の烏天狗の像がたくさんあります。鶴岡八幡宮は明治の廃仏毀釈まで、神社というより八幡宮寺という寺が中心でした。ここでは、流鏝馬が行われますし、剣道場もあります。

鎌倉時代には、新しい仏教が現れます。

阿弥陀信仰となる浄土宗、浄土真宗、時宗の浄土教と庶民に法華経の教義を広める日蓮宗が勃興します。しかし、浄土宗の法然、浄土真宗の親鸞、日蓮宗の日蓮ともども、流罪に処せられます。

法然の「選択本願念仏集」は、禁書に指定されます。日本で最初の発禁本は、わいせつ文書ではなかったのです。

もちろん、修行をして仏の道に近づく人たちが、他力の力で往生する人たちを墮落した人たちと見做す考え方もあったと思いますが、庶民のお布施が、新興の仏教に流れることが、幕府の勢力にとって都合になったためと考えるのが自然の流れではないでしょうか。

■戦国時代

室町時代になると、比叡山などの仏教の勢力が庇護している幕府や武士の勢力を脅かす存在になります。人口の増大により、新田開墾が地方領主に許されるようになります。農民が与えられた田畑だけでなく、自分たちで開墾した農地から税金を納めることは、納得がいかないと思うことは自然の流れだと思います。また、農民たちは、領主がパワハラによる強制的な徴税や升の大きさを勝手に変えて水増しするなど不公平な租税に反発し、一揆という手段に出るわけです。それを鎮圧するのは地方下級武士や寺の僧兵というわけで、公家や朝廷の発言力が落ちていきます。応仁の乱による都の荒廃もそれに拍車をかけます。そういった意味で、権力者にとって受け入れがたい封建制度の破綻という状況が現実になります。

織田信長は、地方領主の勢力を抑え、民衆の不満の根源になる徴税のインチキを鎮めるために、検地刀狩りを実施します。実行部隊は秀吉でしたので、太閤検地という名前も残っています。また、増長した宗教勢力に対して、信長は比叡山焼き討ちという形で反攻します。このころ、キリスト教が伝来してきて武将に取り入れたというのも、仏教勢力としては皮肉な話です。

戦国時代、浄土真宗では、蓮如が御文によって布教活動を活発化し、門徒が増えてきました。庶民も武士や公家のもと思っていた仏教でも、浄土教ならば信じることができ、極楽往生できるという話に期待します。

何しろ、農民は鳥や獣、害虫の食害を減らし、時には殺さなければ良い収穫が得られません。また、猟師は鉄砲で獣を撃って生活し、漁師は魚を取って生活しますから、多くの庶民は五悪の一つ殺生をしながら毎日を生きることになります。旧来の仏教では、輪廻から脱して天に行くことが絶対にできません。そこで、南無阿弥陀仏を唱えれば、極楽往生が定まる浄土教は救いになったと考えます。

■一向一揆の時代

蓮如上人は、御文をせっせと書いて、地方の有力者に送付します。それにより、蓮如上人が布教すると多くの人が集まるようになります。

一部の門徒の中には、お寺の門徒を一大勢力にして、重い税金を課したりする為政者に反旗を掲げます。これが一向一揆になったといわれます。地方豪族が、勢力争いに門徒を利用することもありました。浄土真宗の盛んな土地には、水運や鉄砲に通じた人があり、地方豪族はうまく結びつこうと考えました。

一大勢力となった一向宗（当時は浄土真宗といわなかった）は、石山本願寺（大阪城）で織田信長と戦いになります。当時の門主顕如は石山本願寺を信長に引き渡すことで和解します。顕如は長男教如に後処理を任せて石山本願寺を後にします。ここで、秀吉は京都の西本願寺の位置に土地を与え本願寺とし

ました。しかし、教如は織田信長を信用せず石山本願寺に居残ります。

このことがあって、教如は隠居させられ、弟の准如が門主となります。教如は、徳川が奥州攻めから戻るときに功績があったので、江戸時代になると徳川家康から本願寺の東に土地を与えられ東本願寺を建立しました。徳川が兄弟喧嘩をさせて、浄土真宗の勢力を削ごうと考えたともいわれています。

■行政としての仏教

本能寺の変、関ヶ原と戦乱が続き、徳川幕府の時代になると、キリスト教が禁令となります。宗門改寺請制度ができると、寺院は檀家に対して自坊の檀家であることを証明する寺請証文を発行するようになります。年に一度宗門人別改帳が作成され、バテレンでないことを証明しました。つまり、どこかの寺に所属していないと異教徒と見做される状況になります。

徳川幕府は、入り鉄砲で女を警戒しましたから、旅行する場合には、パスポートとなる通行手形は寺請証文が使われました。大名の藩校とは違った寺子屋が開かれるなど、お寺は戸籍作成や学校としての教育など行政の役割を果たすことになりました。宗門人別改帳は檀家名簿とは厳密な意味では異なりますが、結果的に家とお寺が密接な関係が作られました。

反面、信仰とは異なった形でのお寺への帰属を強制されたことになります。

お寺は、人口が増えれば確実に檀家が増えるという状況になり、戦乱が収まると、文化が発展し、お寺の荘厳や仏教美術にお金が掛けられるようになります。隣の村のお寺より、自分の菩提寺が立派な方が、鼻が高かったので、お金持ちはお寺の普請に喜んで寄付をしました。

江戸時代までは、神仏習合（神仏混交）といって神社は五穀豊穰や結婚などハレのお祭り、葬式などの穢れは仏教が担当していました。儒教の影響で神仏分離して神社の隣にお寺があるというようなことありましたが、これを神仏分離といいます。

■廃仏毀釈

明治になって、新政府は江戸時代まで幕府に優遇されていた寺院の勢力を削ぐため、廃仏毀釈を行います。現在でも、新政府の中心となった薩摩藩の鹿児島では、人口に占めるお寺の数が極端に少ない状況にあります。

このころ、浄土真宗以外の宗派でも、お坊さんの結婚が許されるようになりました。

天皇制を打ち出したため、神道が優遇され、また、軍人など政府に功績のあった人が現人神として祭られることが盛んにおこなわれました。東郷神社、乃木神社などがそれにあたります。富国強兵の掛け声のもと、お寺の梵鐘が武器製造の原料の金属として供出されたということも廃仏毀釈が進められた要因としてあるようです。

第二次世界大戦が終わると、子供の教育では、科学が重要視されます。

目に見えるもの、証明できるものが正しいという教育です。また、仏様や妖怪などの伝説や民話などの言い伝えが非科学的なものとして教えられるようになります。神道も天皇制とともにタブー視されます。

集団就職などで人間の流動性が高まると、江戸時代の寺請制度で属していた菩提寺との関係が希薄になります。特に、団塊の世代といわれる方たちは兄弟が多く、次男、三男といった働き手は都会に出ていく状況になりました。その方たちは、都会に生活基盤を持ち、その子孫たちは菩提寺の住職に会ったこともなければ、墓参りもしたことがないという状況が生まれました。

檀家制度の崩壊です。

■仏教の進む道

仏教の歴史をお話してきましたが、歴史の流れ、政治の流れに仏教がいかに影響を受けたか感じていただければ幸いです。

仏教は死を含む苦を滅するものというところから始まっていますが、実は、自分たちの生き方について教えてくれるものでもありました。

嘘をつくと舌を抜かれるとか、悪いことをすると地獄に落ちるという話を子供のころから聞かされると、自然と正しい倫理観を共有することができる一面があると思います。もちろん、お釈迦さまが、悟りを開いたときに、悪いことをして地獄に落ちるとのことまで考えていたとは思いません。

文部省の役人や財務省の役人のテレビ会見を見ると、舌を抜かれて地獄に落ちるのではないかと心配しませんか？

言い伝えの仏教が実は、人々の生活の潤滑油になっていたと思います。今の子供たちは、ほとんど知らないと思いますが、こういった面でも仏教の果たす役割があるのではないかと思います。

文化庁の調べでは、2016年の日本の寺院の数は77,206寺です。神社の数の81,158社ですので、拮抗しています。コンビニエンスストアの数が2017年2月時点で55,090店ですので、寺院、神社の数がいかに多いかお分かりだと思います。

しかし、日経の調べによると、1/3の宗教法人で後継者がいないという状況だそうです。

反面、最近はお坊さんを派遣で済ませることも普通になってきました。お寺との付き合い方がわからないので、お葬式だけ済ませればよいと考える人たちも増えてきたと思います。

過疎が進む地方のお寺の次男、三男のかたは、人口減少で仏事が減ってきて生活が厳しくなったため、都会の僧侶派遣に応募する人も増えてきたようです。30社ぐらいの派遣会社でお坊さんを派遣しています。

しかし、お葬式はしてもらえるものの、一周忌などの法要やお墓の相談などは受けてもらえません。仏事の中で一番お金のかかるところだけ、つまみ食いしているような感じがします。しかし、お葬式以外の法事をしない方には便利なものかもしれません。先祖を送ることに、お金をかけたくないという人が増えると、派遣のお坊さんによる一日葬も増えていくのではないのでしょうか。

都心では、雨の日でもお参りができるということで、ビルの中にある立体駐車場のようなお墓を求める人も多くなりました。現在の価格では、墓地に比べて安くなりますが、50年経ってビルを建て替えるときにどうするか、故障した時の修理をどうするかという基本的な検討がされていないと思います。自宅であれば、住みかえればよいことですが、お墓はそのようにはいかないと思います。

正信寺は、開基となる釋友教が浅草の東本願寺別院から東京大空襲で焼け出されてから始まった、昭和のお寺です。そういった意味で、過去のしがらみのないお寺ということができます。

お坊さんというのは、「男はつらいよ」の笠智衆演じるお方様のように、世間ずれしていない人というイメージがあると思います。ところが、現住職も私も、サラリーマン経験をしています。それは、皆さんと同じ目線で宗教をとらえることができていると感じています。先祖への報恩も重要ですが、人のつながりが希薄になってきた現代において、心の安寧を求めていくことは宗教が追及することの一つではないかと思っています。

6月6日 NHKの「ためしてガッテン」という番組では、実は今、健康寿命を延ばすために最も効果的と研究発表されているのは、禁煙よりも、運動よりも、肥満解消よりも、「人とのつながりを作ること」。人とのつながりが少ないことは、心臓病や認知症、筋力低下を引き起こし、結果として「早死にリスクが50%高くなる」というアメリカの調査結果が発表されるなど、体の衰えを加速させる最大の要因とわかってきました。

お寺が、人とのつながりを作ることには貢献でき、健康寿命が延びることに役立つようになっていけばよいと思います。

信心は阿弥陀仏への帰依です。信仰は人と仏の関係ですが、それが、人と人をつなぐ心のきずな、価値の共有になることが、これからの仏教の進むべき道ではないかと思えます。